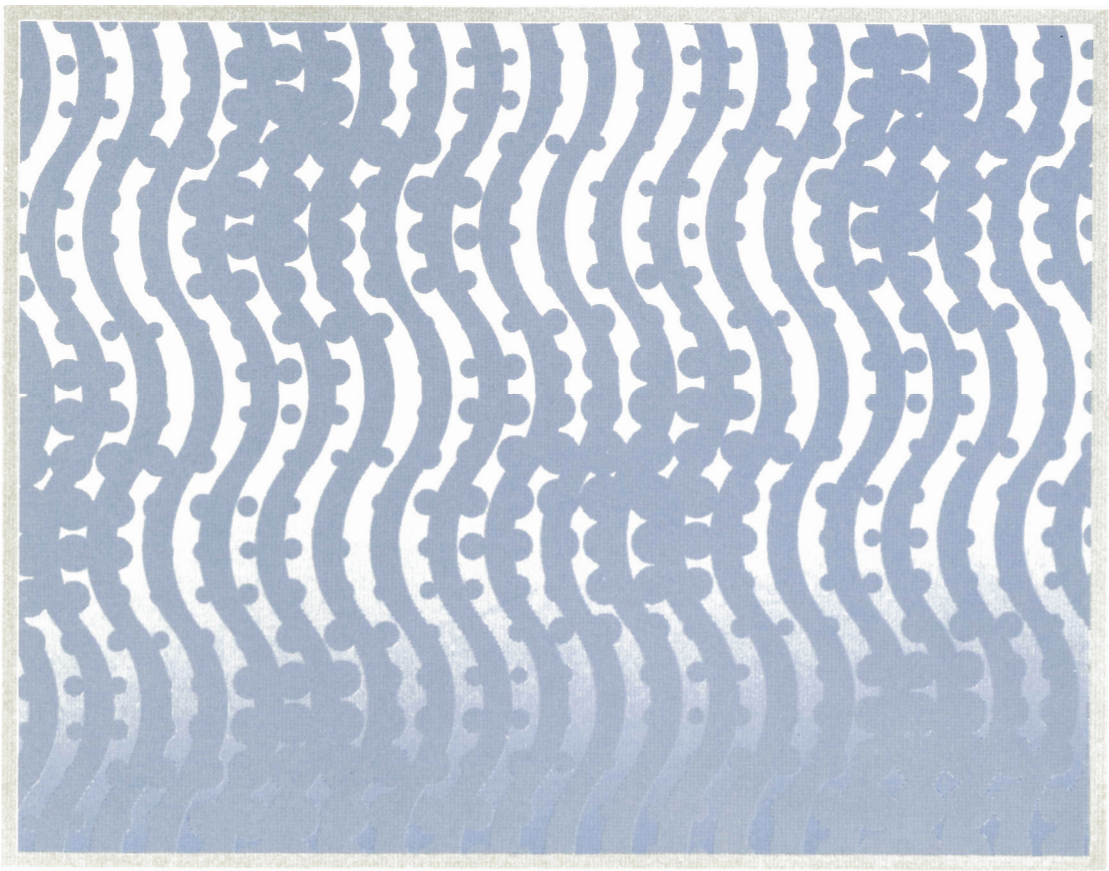
そるえんす



No.7

――目次

巻頭言……1

「融」や「松風」のことなど ……2

君知るや南の国　アンデスの麓に人生を楽しむチリの国の人々を
――日本人から見たチリ人――……8

塩　梅……19

沢田遺跡
――伝説「千々乱風」の舞台――……23

塩を売る……24

平成3年開催の第3回研究発表会の開催日と会場が決定 …27

第7回国際塩シンポジウムの準備状況

財団だより……43

編集後記

奥ゆかしいこと

日本たばこ産業株式会社
代表取締役社長　水野　繁

「奥ゆかしい」というのが、幼い頃の我家での最上級の褒め言葉だったと、今でも思っている。しかし奥ゆかしいとはどういうことなのかと問うても、大人になればわかるといわれ、教えてもらった記憶がない。

何事かを深く研究したり真面目に実行したりすること、それが世の中の役に立つことであること、そしてそのことを自慢したり、宣伝したりしないこと、ということではないかといつの頃からか思うようになっていた。

最近の世の中の風潮は、奥ゆかしいことからどんどん離れて来ているように思えてならない。何がそうかと指し示すのは難しいが、実力がともなわないのに虚名だけが世の中にもてはやされすぎるようだ。虚名は程なく泡のように消える。有名になるのも、それが消え去るのもそのスピードが私にとっては速すぎるのである。

もっともスピードは、この50年間、われわれがひたすらに追い続けて来たものである。新幹線もはじめは好奇心と歓喜の念に包まれたものだが、もう生活の中に取り込まれている。新幹線によって時間の節約はできたけれど、時間を節約することによって失っているかもしれないものがある。車中での人情とか車窓からの風景とか人生の機微を触れるものを失っているのかもしれない。そしてもっと肝心なことは得たものも失ったものも、生活の中に取り込まれるに従って、そうと意識されなくなってしまうことである。

スピードということが悪いと思っている訳ではない。時間短縮は計算のできる効率上昇であるし、これを心掛けないと競争に負ける。しかし計算できないものを失っていないか。奥ゆかしさも、その分野に属するものであろう。

塩の仕事に関与させていただいて、奥ゆかしいというのは、この業界のことではないかと感じている。全国12万店の小売店は、仕入価額と売上価額との差額が1店当たり年間約5万円、月当たり約4,200円に過ぎない。決して利益を計算してできる商売ではない。塩は、生きていくために欠くことのできないものである。小売店は、人間の身体でいうならば、毛細血管の役目をはたしている。そして毛細血管と同様、自ら果たしている役割を、自分で吹聴しようとはしないのである。そこが奥ゆかしいところと私は思う。しかし自分で言わないのなら、私が世の中に言おうではないかと思う。

世の中は激しく変化しているし、その変化に対応できないと亡び去る外はない。しかし変わるということは、すべてを捨て去ることではない。変化の中で誰からも気付かれないまま消え去っていくものも少なくないが、どんな変化の時代でも黙々と自分の役割を果たしている奥ゆかしいものは大事にしたいものである。

「融」や「松風」のことなど

日本たばこ産業㈱広島支店長
上野　堅實

日本音楽の性格と系譜

私のような者が、音楽についてお話しするのは、些かおこがましいのですが、趣味としております日本音楽に限定し、更にそのごく一部について申し上げる程度のことは、或いは許されるかも知れません。

よく「音楽には国境は無い」といわれます。ただしこれは、17世紀以降大いに発展した西洋音楽が優れた普遍性を具えていることを念頭に置いていわれることが多く、世界各地で伝承されて来た民族音楽までを含む音楽一般についてのことではないような気がします。

ともあれ、世界各地のエスニックな音楽は、音階も、リズムも、音楽の意味や使われ方も、勿論その歴史も、それぞれの独自性を持っています。

日本の古典音楽の場合も、5音音階であるとか、2分の2拍子が基本リズムだとか、「さわり」という一種の雑音までも玩味するとか、色々な特徴が挙げられていますが、私は、所謂オタマジャクシで表される音構造の特徴の外に、豊かな言語的表現を伴った「言葉の音楽」が中心になっていることを見逃す訳にはいかないと思っています。つまり日本古典音楽は、音楽性半分、文学性半分といった性格を有していると申せましょう。西洋音楽流にいえば、器楽より声楽中心ということになるのでしょうが、この場合「声楽」では何かしっくり来ません。やはり「語りもの」「歌いもの」という方が相応しい気がします。

「言葉の音楽」の伝統は、外来音楽が幅を利かせていた古代が終り、大陸文化を自らのものとして咀嚼し、多様な発展を遂げた中世期以降に確立されたと考えられます。特にこの時期、猿楽は、田楽、早歌、曲舞（くせまい）、幸若舞（こうわかまい）などの要素も取り込み、幽玄な趣のある芸能（これを後には単に「能」というようになります）を確立し、「能」の為の言葉の音楽としての「謡曲」を完成させました。この、語りもの音楽としての謡曲の優れた文学性が、後の日本音楽に大きな影響を与えたのです。これからお話しする歌いもの音楽の代表・箏曲（そうきょく）の「融（とおる）」も、主題はおろか、歌詞までそっくり謡曲の「融」から採っています。

ところで、箏曲「融」と申しましたが、こうした古典箏曲の殆どは「地歌」が基になって発展して来ました。地歌といいますのは、17世紀以降京都で発達した三味線音楽で、検校（けんぎょう）とか勾当（こうとう）とかの

位を持つ男性盲人音楽家達により作曲され伝承されて来たものです。

三味線が我が国に伝来した時期は永禄年間(1558～70)とされており、この楽器を最初に扱ったのは盲人の琵琶法師達だったと考えられています。因みに、我が国の三味線の撥(ばち)は、琵琶のものと同類型です。

三味線は、最初は俗謡の伴奏に使われていたようですが、やがて京都を中心に興った新しい、はんなりとした歌いもの音楽の伴奏楽器となりました。この音楽を“京都の地の歌”という意味で「地歌」と呼ぶようになったのです。なお、地歌用の三味線は地歌三味線（中棹）といいまして、浄瑠璃三味線（太棹）や江戸長唄三味線（細棹）とは少し異なります。

一方、三味線音楽とは別に、本来雅楽用の楽器であった箏(こと)が、中世末期には俗楽にも使われるようになっていましたが(これを俗箏(ぞくそう)といいます)、17世紀後半には地歌の音楽家達が箏の演奏も併せ受け持つようになり、両者が一体化されて「地歌箏曲」として発展を遂げて参りました。この時期に活躍したのが生田検校（1656～1715）であり、現在の「生田流」の盛行は、近世箏曲の成立に同検校が大きく貢献したことを物語っています。この「融」も生田流の曲で、近世も終りに近い文化文政期（1804～30）に石川勾当（生没年不詳）によって作曲された大曲です。

実はこの頃になりますと、本来三味線を伴奏とする歌いもの音楽であった地歌も、箏の比重が次第に増し、また、楽器だけによる長い合いの手(手(て)事(ごと)といいます）が挿入されて器楽的な傾向を強め、「融」のような手事ものの大曲が次々と作曲されます。こうした、箏が活躍するようになってからの地歌箏曲を、段ものなど箏本来の曲と併せて、今では単に「箏曲」と呼び、半面「地歌」という呼称は、もともとの趣を残した三味線歌いもの音楽にのみ専ら使われる状況にあります。

六条河原の院の塩竈

箏曲「融」は、典型的な京風手事ものですが、前述のように、謡曲の「融」を箏曲に移したものですので、先ず謡曲「融」の内容について概略申し上げて見たいと思います。

謡曲「融」は、別名を「塩竈」といい、観阿弥清次(1332？～84)の原作を世阿弥元清(1363～1443)が改作したものと考えられており、粗筋は次の通りです。

都に上った旅僧が六条河原の辺りで休息していると、汐汲みの老翁が現れる。海浜でもないのにと不審に思い尋ねると、ここは昔、嵯峨天皇の皇子左大臣源融(みなもとのとおる)（823～95）が営んだ六条河原の院跡で、陸奥(みちのく)の千賀の塩釜の眺望を写した池や浜を築き、毎日難波の御津(みつ)の浦から汐を汲んで来て塩を焼かせ、その風流を楽しみ、池には舟を浮かべて酒宴遊舞に明け暮れたところだから、汐を汲んでいると知るべきだと答え、周囲の景色などを説明して去る。

旅僧はそのままこの旧跡で仮寝するが、その前に融の霊が現れて、かつて栄華のうちに営んだ壮大な庭園について、中国の賈島(かとう)の詩などを引いてその由縁を感慨深げに語り、やがて明け方となって名残りを惜みつつ消えて行く。

ところで作者がこの曲を作るに当っては、『古今集』<巻十六>に載っている紀貫之（872？～945）の歌「君まさで　煙絶えにし塩がまの　うらさびしくも見えわたるかな」から曲想を得たと考えられております。この歌の詞書(ことばがき)に「河原の左の大臣(おほいまうちぎみ)の身まかりてのち、かの家にまかりてありけるに、しほがまといふ所のさまをつくれりけるをみてよめる」とあり、謡曲「融」の中でもこの貫之の歌が紹介されています。

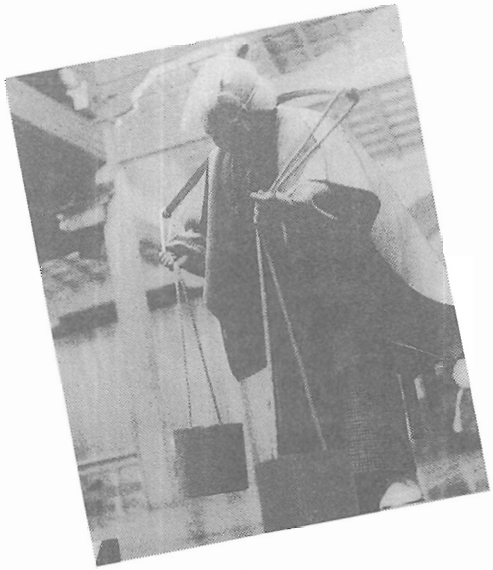
また、『源氏物語』「夕顔」の段で、光源氏が夕顔と共に夜を過ごし、その夜半に夕顔が物の怪に憑かれてそのまま息絶えてしまった荒れ果てた「なにがしの院」とは、この六条河原の院跡を想定したものとされています。

箏曲の「融」は、この謡曲「融」の後半の、源融の霊が六条河原の院の庭園のかつての壮麗さを語る所から始まり、歌詞は謡曲の詞章をそっくり採っております。

曲は、三絃と箏による比較的長い前弾き（省略されていることもあります）の後、「あの籬が島の松蔭に、明月に舟を浮かめ、月宮殿の白衣の袖も、三五夜中の新月の色、千重振るや、雪を廻らす雲の袖、さすや桂の枝々に、光を花と散らす粧い、……」と低い調子で歌い始めるのですが（尺八は最初二尺管又は一尺九寸管を用います）、その幽玄な趣には味わい深いものがあります。

なお、出だしの「籬が島」とは、別掲の地図に見るように、塩釜湾の最深部、塩釜神社から間近に見える松の小島のことで、源融は、そこまで念を入れて千賀の浦に摸した庭園を作らせ、塩竈を築き、塩を焼かせたと伝えられているのです。

勿論、風流のために贅沢な趣向を凝らしたのであり、塩を作るのが目的ではなく塩を焼く竈の煙が重要だった訳ですから、海水をそのまま焚いたものと思われます。或いは、とことん千賀の塩釜に拘ったのであれば、現在でも塩釜神社の神事として伝えられているように、干して塩の結晶が付着した海藻（藻塩）を、容器の上に敷いた簀の子のようなものに積み上げ、上から海水を掛けて洗い落し、濃い塩水（鹹水）を採って、それを煮詰める方法を採ったのかも知れません。尤も、9世紀には西日本では塩砂採かん法が普及していたとされますので、園内に塩浜まで作り、揚浜式による製塩を試みたことも考えられなくはありません。いずれにせよ、能の汐汲みの翁は汐汲み桶（担桶）を担いでいますので（写真①）、作者の念頭には、単に海水を汲んで運ぶイメージしか無かったのでしょう。



写真①
「融」（塩竈）＝担桶で汐を汲む翁
（吉越立雄氏撮影）

「松風」と「汐汲」

「融」の汐汲みの翁といえば、長唄舞踊曲に「汐汲」という曲があることを思い出します。

長唄の「汐汲」は、文化8年（1811）初演の七変化舞踊「七枚続花の姿絵」の中の舞踊の一つですが、実はこの曲も謡曲から主題を採っているのです。謡曲の名は「松風」で、「融」と同様、観阿弥の原作を世阿弥が手直ししたものと考えられています。そしてこの謡曲「松風」も、「融」の場合と同じく『古今集』に収められている在原行平（818～93）の歌「立ち別れ　いなばの山の峯に生ふる　まつとし聞かば今かへり来む」<巻八>及び「わくらばに　問ふ人あらば須磨の浦に　藻塩たれつつ侘ぶと答えよ」<巻十八>から曲想を得ているのです。

在原行平は在原業平の兄に当たりますが、一時須磨に流されていましたから、<巻十八>の歌は彼自身のことで、“たまさかにも私のことを尋ねる人でもあったら、須磨の浦で藻塩を垂れつつ萎れ

ていると伝えて欲しい”と読んでいるのです。これを謡曲「松風」では、次のように行平を待ち佗びつつ世を去った蜑乙女の話に仕立て上げています。

行平が須磨の浦に三年ほど流されていた折、松風・村雨という二人の蜑乙女と情を交わすが、やがて行平は許されて「まつとし聞かば今帰りこむ」の歌と烏帽子狩衣を遺して都へ還った。

行平を待ち佗びつつ世を去った二人の姉妹は、亡霊となって須磨の一本の松に宿るが、蜑の塩屋に一夜の宿を頼んだ旅僧の前に現れて、姉の松風が立烏帽子狩衣を着け、断ち切れぬ妄執を語って舞い、回向を頼む。旅僧が朝目覚めて見れば、ただ松風の音がするばかりであった。

この謡曲「松風」のシテ松風だけを取り上げ、汐汲む蜑に立烏帽子狩衣姿で舞わせるのが長唄舞踊の「汐汲」です。

因みに、地歌箏曲には「汐汲」という曲はありませんが、謡曲「松風」から主題を採った同名の「松風」はあります。歌詞はやはり「融」と同じように謡曲「松風」の詞章を採ったものとなっており、前段は全く同文で、次の通りとなっています。

「懐しや行平の中納言、三年はここにすまの浦、都へ上り給ひしに、このほどの形見とて、御立烏帽子に狩衣を、遺しおき給へども、これを見る度にいや増しの思ひ草、葉末に結ぶ露の間も、忘ればこそあぢきなや、形見こそ、今は仇なれこれなくば、忘るる隙もありなんと、詠みしも理りや、なほ思ひこそ深かりし、……」

なお、地歌箏曲の「松風」には、歌詞がほぼ同一の新旧2曲がありまして、古い方を「古松風」(地歌)と呼び、元禄年間(1688～1704)に活躍した岸野次郎三(生没年不詳)の作曲とされています。ただし、今では伝承する人が少なくなりました。もう一つの「京松風」と称される方は、寛延(1748～51)以降の改曲と考えられていますが、改曲者は定かではありません。

更に、この生田流「松風」の外に、山田流「松風」という曲もあります。

山田流とは、江戸浄瑠璃などの趣を取り入れた、歌を重視する流派で、山田検校(1757～1817)によって興こされ、江戸を中心に広まり、生田流と箏曲界を二分するまでになりました。山田流「松風」は、山木検校(1800～54)の原作を中能島松声(1838～94)が明治初期に改作したもので、今では「松風」といえばこちらの方を指す場合が多い状況です。ただしこの曲は、直接謡曲「松風」から主題を採っている訳ではありません。しかし、背景として、浜の苫屋と松風の声、月の光などを配しておりますので、謡曲「松風」を意識していることは窺えます。

ところで、謡曲「松風」と長唄「汐汲」では、汐汲みの出て立ちが少し異なります。「松風」はもともと行平の「藻塩たれつつ」という和歌から曲想を得ていると思われる訳ですから、藻塩採かんを様式化すべきものでしょうが、松風と村雨は「汐汲車わずかなる、浮世を廻るはかなさよ、波ここもとや須磨の浦、月さえ濡らす袖かな、……」の謡いで、汐汲車を引いて登場します。(写真②)

写真②
「松風」＝担桶を積んだ汐汲車を引く松風
(吉越立雄氏撮影)

片や長唄の「汐汲」は、掲載した豊国の浮世絵のように、立烏帽子狩衣を身に着け、担桶(たご)を担いつつ舞います。(写真③)

尤も、謡曲の「融」といい「松風」といい、9～10世紀に読まれた和歌から曲想を得ているとしても、作曲されたのは早くて14世紀後半であり、平安期に於ける製塩の様子を正しく写しているとは思われません。長唄「汐汲」に至っては尚更です。

写真③
浮世絵の「しほくみ」
＝歌川豊国画
(たばこと塩の
博物館蔵)

箏曲を理解するに当たって

ここに取り上げた「融」と「松風」は、どちらも古い和歌から曲想を得て先ず謡曲が作られ、それが箏曲や長唄などに移されるという経過を辿っています。こうした系譜を持つ曲はこの外にも結構あります。

勿論、箏曲には、これ以外の系統のものも沢山あります。最初から箏曲として作詞作曲されているものが一番多いのですが、古歌をそのままないしは箏歌に直して歌っているもの、『源氏物語』など古典文学の内容をテーマにしているもの、古い逸話を基にしているもの、当時の俚謡に依っているものなど色々です。その上、それぞれの歌詞の中には、本歌取りのような形で、古歌や古典文学や和漢の故事などを引いている部分が随所に折り込まれています。

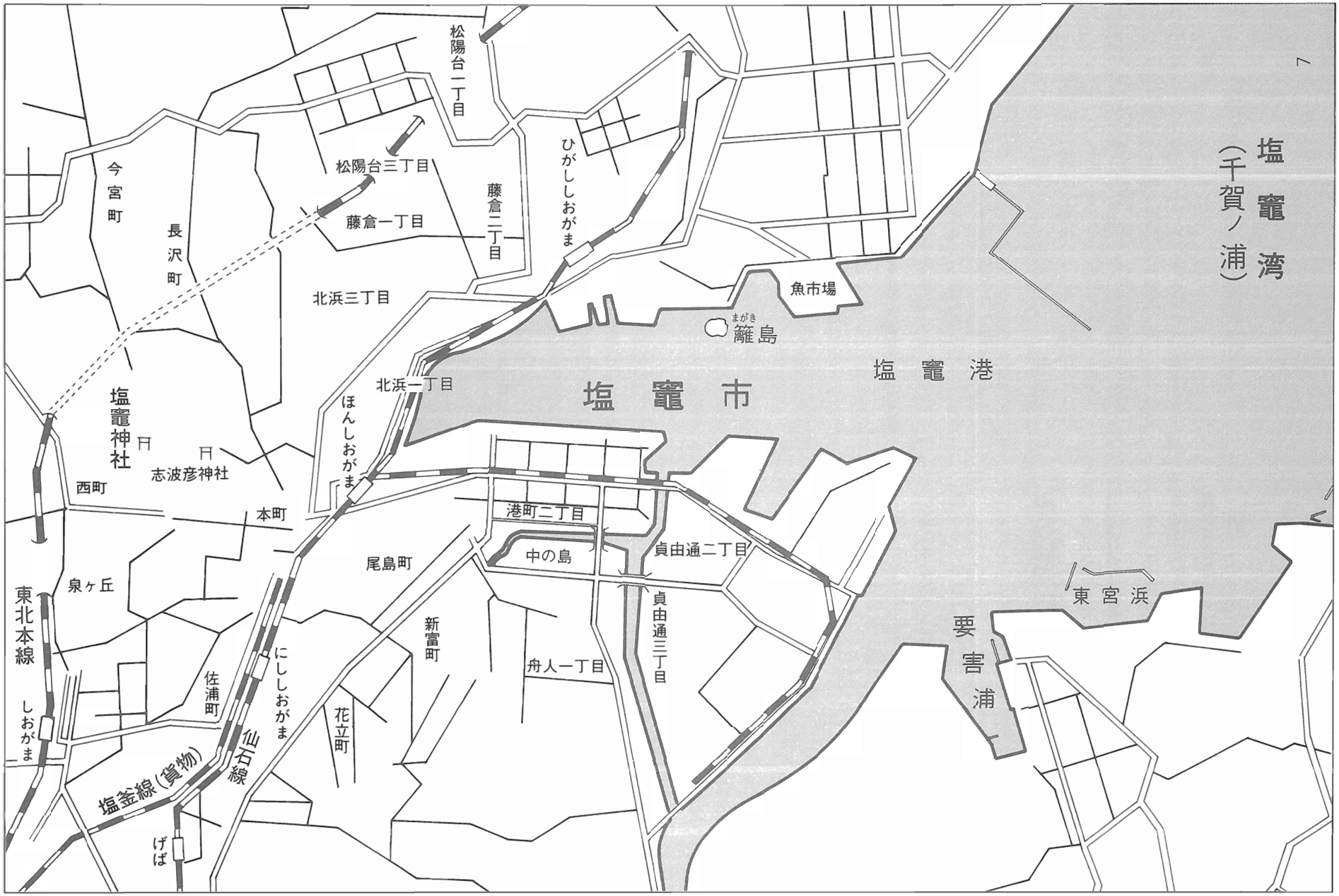
例えば、「融」の中の「月宮殿の白衣」とは“月世界の宮殿に住む月夜を司る白衣天子の衣”を指し、「三五夜」とは“十五月”のことで、「さすや桂の枝々に、光を花と散らす装い」とは“月の光は、月に生えている桂の木の花が飛び散っているもの”との伝承に基づいており、『古今集』には、源恵(ほどこす)の「秋来れど　月の桂の実やは生(な)る　光を花と散らすばかりを」という歌が収められています。

また、「松風」の「形見こそ、今は仇なれこれなくば、忘るる隙もありなんと、……」は、『古今集』<巻十四>の読人知らずの歌を引いているもので、この曲を作るに当っての重要なヒントになっていると思われます。

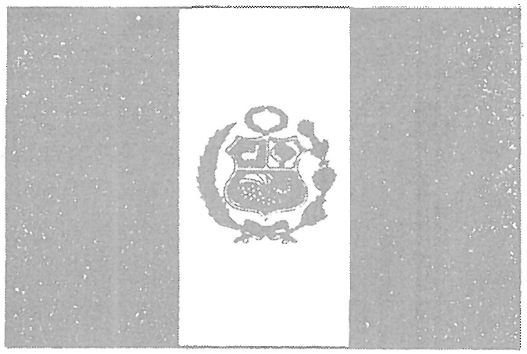
以上のように、日本古典音楽は「言葉の音楽」といった性格が強く、それだけに文学的要素が大きな比重を占め、歌詞は、古典や故事に根ざした内容に裏打ちされているために、奥の深いものとなっております。

また、或る曲の主題を、後に派生した異なるジャンルの音楽がそのまま取り込んだり、それを基に新たな展開を図ったりしています。更に、箏曲の「越後獅子」と長唄の「越後獅子」のように、旋律まで遣り取りしている場合もあります。

そこで、日本の古典音楽については、歌詞の内容やその文学的な系譜、或いは異種の音楽との相互関係などを良く理解しなければ、本当に曲が解ったことにはならないと極言する人さえいます。確かにそうかも知れません。ただ今の時代では仲々難しい注文でしょう。とはいえ、日本古典音楽が「言葉の音楽」といった特徴を持つ以上、指導する側も、お稽古事として単に弾き歌うことだけを教えるのではなく、歌詞の文学的な内容や周辺音楽との関係についても、出来るだけ解説してあげる努力が必要なことは間違いないでしょう。ここに出て来ました古い時代の製塩法についても、専門家の方々にご教示をお願いする次第です。



塩竈湾（千賀ノ浦）の籬島と塩竈神社



君知るや南の国 アンデスの麓に人生を楽しむ チリの国の人々を

――日本人から見たチリ人――

柏　村　　博
崎戸製塩株式会社取締役社長

プロローグ

南米と言えば、ブラジルであり、ペルーと言う人が殆どだ。ところがブドウの房がそのままブラ下がったような南米大陸の西岸に、細長いチリと言う国がある。

私はそこに足かけ８カ年滞在した。三菱商事と三菱鉱業が鉄鉱山を開発した時、現地駐在したのである。８カ年と言えば会社員生活の４分の１にも当ったであろうか。決して短い期間ではない。それに私はまだ若く30歳代の希望に燃えていた頃だったから努力していろいろの事を学んだように思う。

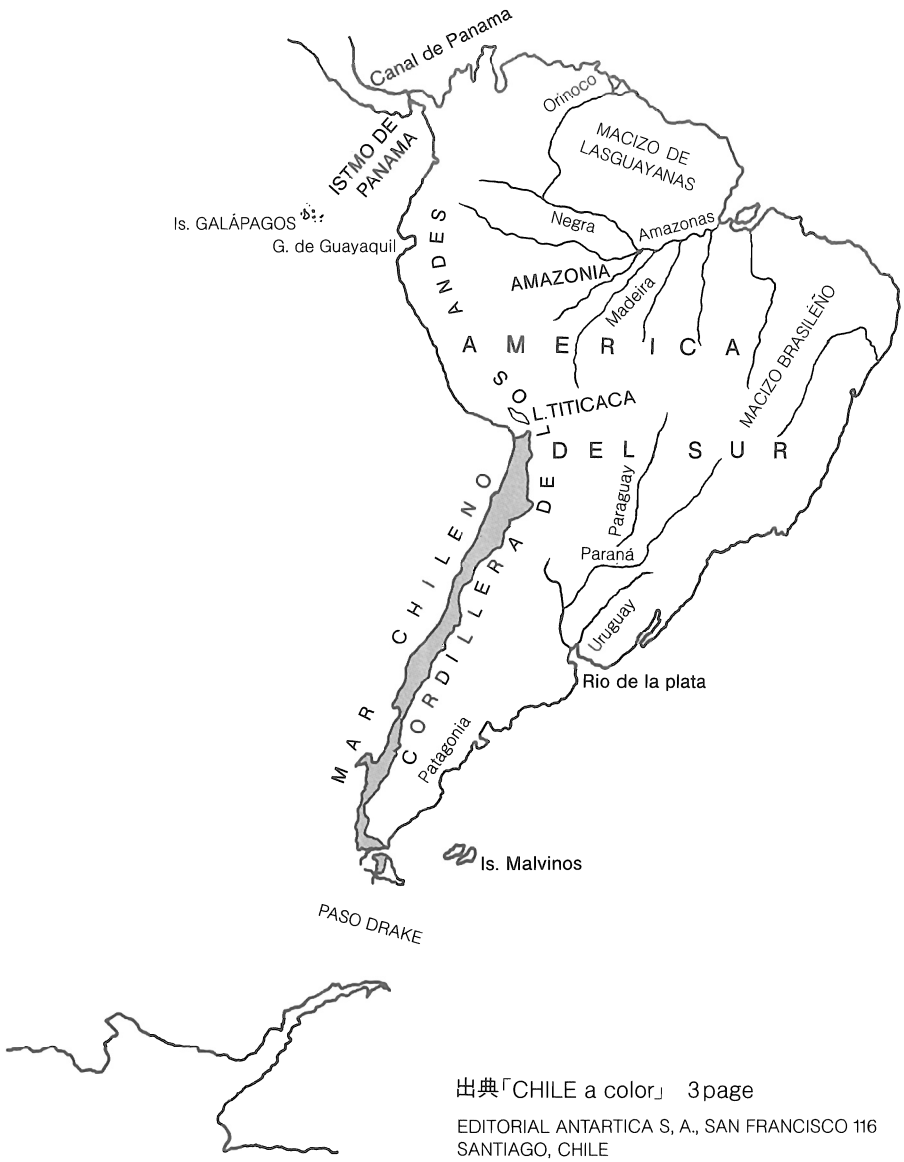
そのなかから今回は『**日本人から見たチリ人**』ということで会社業務に関係のありそうな側面を捉えてみたい。いきおいそれは大きく言えば民族性とか人の性格に絡む話になるが、そのような人文学的側面を容易に断定できるものではない。

あくまでこれは私自身が体験したささやかな憶い出にすぎないものとして聞いていただければ結構というものである。

その地理と自然

チリは次頁の地図で見られるように南米大陸の西岸に南北約4,200km、東西でほぼ170kmの細長い鰻の寝床のような国である。

東はアンデス山脈を境にアルゼンチンに接し西



出典「CHILE a color」 3page

EDITORIAL ANTARTICA S, A., SAN FRANCISCO 116
SANTIAGO, CHILE

南アメリカ概要図

は太平洋に面しているが、特色は長い南北の地勢の格差。北部はペルーの南から続く荒涼たる砂漠地帯、南部は鬱蒼たる森林におおわれた多雨地帯、この全く相反する南、北、部の中央に首都サンチャゴがある。ここから西即ち太平洋へ向って約120kmの海浜に南米でも数少ない保養地ビニヤデルマルの町がある。ルーレットを楽しめる市営カジノがあるが、ネクタイ着用のこと、しかも運動靴では入場できぬ。即ち少なくとも外見は紳士たることが必要。

ここから南太平洋のただ中にむけ4千km近くを飛ぶと有名なイースター島がある。これは下の写真のようにモアイと言われる石像で有名なところである。その建造者さえも分からず唯孤空を眺めて座るモアイの石像、イースター島には多くの歓喜と悲哀の歴史が語られているがそのすべてを知っているモアイは沈黙したままである。

私の子供の頃はチリと言えばチリ硝石で有名だった。その北部砂漠地帯に世界有数のチユキカマタ大銅山がある。私の勤務した鉄鉱山もこのアタカマ砂漠地帯にあった。

しかしチリで最も興味のある地域は南部のマゼラン海峡に臨むパタゴニヤ地方である。万年雪を

イースター島モアイの石像
(『エアリアガイド』162、昭文社、121頁)

チリ最南端の町プンタアレナスにマゼランの像がある(『秘境　パタゴニヤ』朝日新聞社、51頁)

その原住民オナ族の像の右足にさわると「又ここに戻ってくる」とか「幸運が訪れる」とか言われている。※

筆者と家内

※（注）そのどちらも筆者には疑わしいですね。

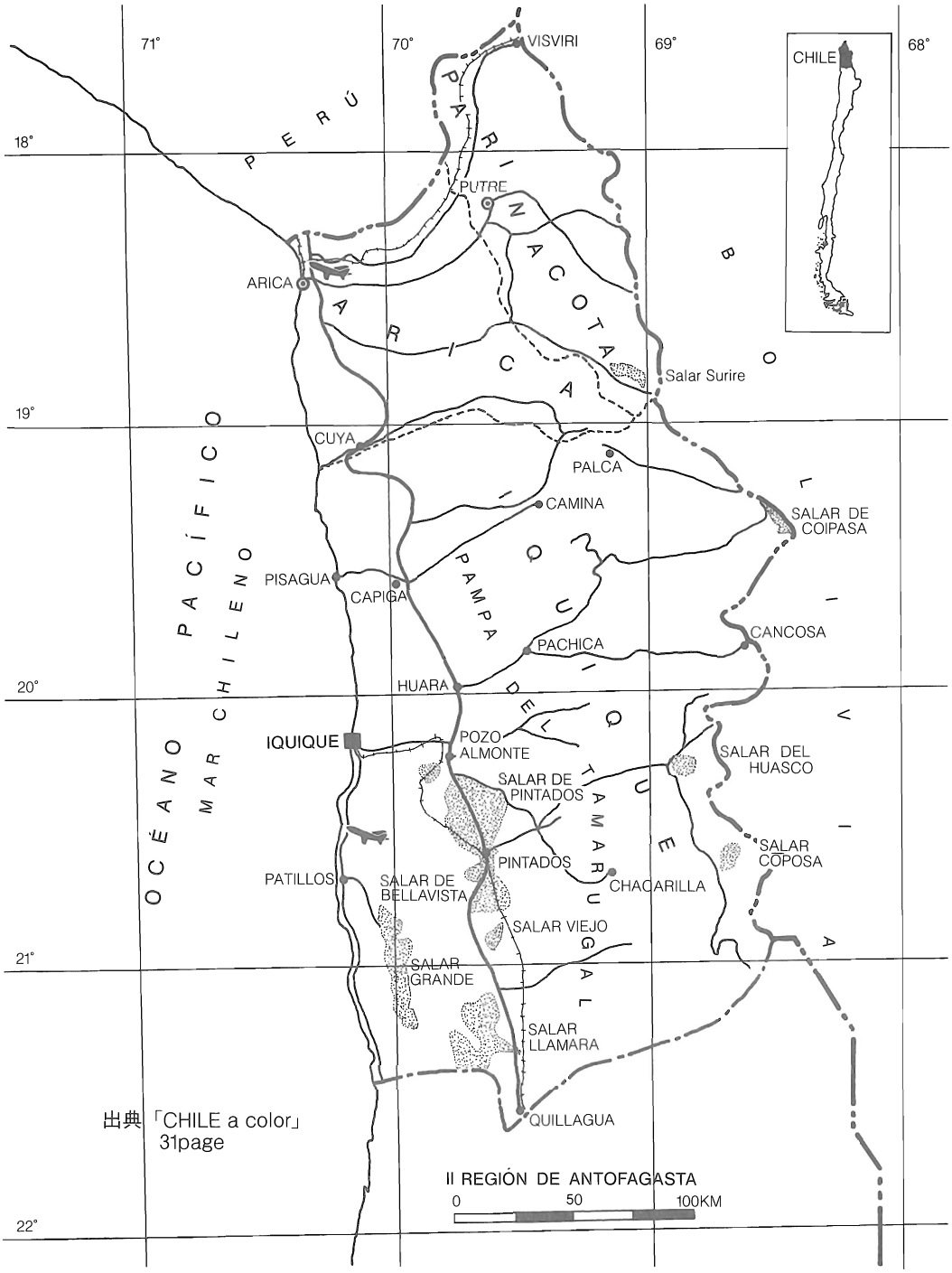
いただくアンデス山脈が南米の南の端に尽きるところ、チリ最南端のプンタアレナスの町がある。更に800kmも飛べば南極大陸だ。山に登れば南極の日本基地にたなびく日の丸が見える。(というのはチリ人特有のジョークである。)

この町から230km北上すれば真夏の白夜が体験できるプエルトナターレスという町がありその町を見下すようにそびえ立つパイネの連峰がある。

アンデス山脈の山道を越えると隣国アルゼンチンへ国境線を突破して入国できる。我々日本人のように四面海に囲まれて陸続きの国境線を持たないものには始めての体験でありやはりある種の感動が湧くものである。

チリの塩が日本に

日本から見ると丁度地球の裏側、(東京から直下



出典「CHILE a color」31page

チリ北部概要図

にボーリングを続けるとアルゼンチンにつくと言われるが、)最も遠い国でもチリに長く住んでおれば日智親善の由来をよく聞かされる。最初に教えられるのが戦艦「和泉」の話である。これは日露戦争の時、チリが完工したばかりのエスメラルダ号を日本に譲ってくれたということ。これが戦艦「和泉」となり日本に向かうバルチック艦隊を発見「敵艦見ゆ。」の第1号の打電をした。

それはとも角、銅や鉄鉱石が日本に輸出されているのは勿論、その開発の合弁会社は最近チリ沿岸漁業にも拡げられている。また南部の森林資源は我々の孫子(まごこ)の時代にはアラスカに次ぐ有力な木材の供給地になるのではないか。

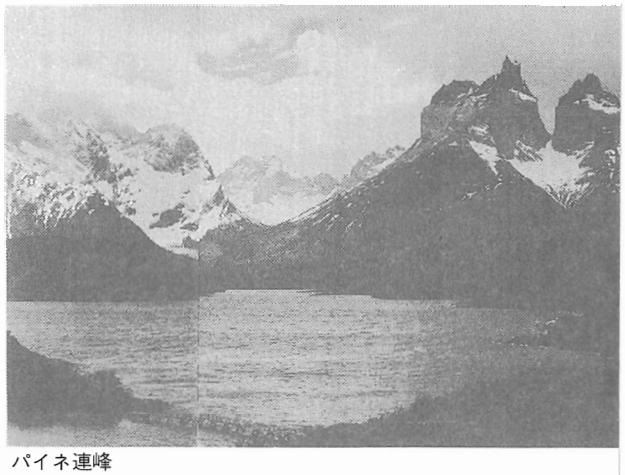
あれこれ希望的観測をあげているうち『月刊ソルト・サイエンス情報』(Vol.2 №8)が報ずるところによると

“チリ岩塩急浮上。旭硝子、年間数十万トン規模の本格輸入決定”とあった。

何だか我が第二の故郷が見直されたかと嬉しくなったが報じられたSALAR GRANDE(サラール グランデ)は前頁のとおりチリの最北州。これより南では更にアンデス山脈寄りの内陸になるがSALAR DE ATACAMA(サラール デ アタカマ)、SALAR PUNTA NEGRA(サラール プンタ ネグラ)はじめ多くの塩湖がある。リチウム採取に目をつけた米国の会社が副産物としての塩をとっていると聞いた。

本　論
ー日本人から見たチリ人ー

え？　今迄のは余談ですか。そうなんです。財団の編集の方から「塩に無関係でも何でもよいですよ。」とのことでしたが権威ある『そるえんす』を汚すことになってはと思い一寸ばかり塩のこと書いてみましたがこれ以上続きません。元々そんな知識はないのですから。ですからこれから冒頭に書いたように私の仕事を通じて知りあったチリのAMIGO(アミーゴ)(チリでは心許せる友をAMIGO(アミーゴ)と言います。女性の場合ですか。AMIGA(アミーガ)です。女性はすべて語尾がAですね。)を通して得たチリ人観を書いてみたいと思います。今の会社の仕事にだって関係がありますよ。各自の人生観はともかく人間の心情というものはまあ共通のところが多いのではありませんか。



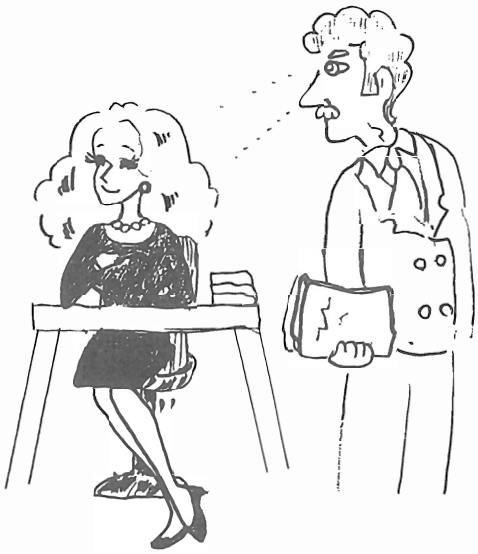
パイネ連峰
出典『CHILE a color』368、369頁

真面目な話なのですから、会社の仕事に役立つかも知れぬと思われることを8つの原則に分類して私の個人的体験を基に書いてみましょう。

第1原則　『美人を秘書に雇うべからず』

チリは『3Wの国』と言われます。3Wって。「WEATHER、気候がよくて」「WINE、お酒がうまくて」あとの1つですか。言わずと知れた「WOMEN、女性が美人」なんですよ。

だから私サンチャゴに駐在している時、来客接待は随分やりましたよ。それはね。南米を回る人、東のブラジルから来ても西のペルーから下りて来てもサンパウロやリマの駐在員が「チリは3Wの国ですよ。」と宣伝してくれるものですから皆サンチャゴで「南米美人の踊りをみながらWINEでも楽しもう。」と期待されるわけです。町を歩いていても日本なら女優さんになれるような美人はザラにいますよ。OH(オー)！SEÑORITA(セニョリータ) BONITA(ボニータ)！(まあ、きれいなお嬢さんだこと。)と立ち止って見詰めるんですよ。GRACIAS(グラシアス)(有難う)という微笑みを交えたお礼が返ってきます。日本だったら「このオジン、頭おかしいんじゃない。エッチ。」と言われるのがオチでしょうね。当時チリのAMIGA(アミーガ)たる母親から教わったんですが、子供の頃から『女は美しくやさしく男を楽しませるのが本領。』と教



えられるんだそうですよ。

サンチャゴで事務所を開いたとき秘書を新聞広告で募集しました。30数名の応募者の中から面接の上、最も美人を採用したんです。ところが場所はチリ、この美人秘書に朝からデートの申込電話が鳴りっ放し。特に不始末があったわけではないんですがどうも落ち着いて仕事する雰囲気をこわすので、やめて貰うことにしました。ナーニ試用期間中のことですから。

今度は失敗せぬようにと我々の西語教師たる現地高校女教師に立会って貰い面接となりました。今回は別に不美人を選んだわけではありませんが、タイプを打っている最中でも終了時間になったらサッと立ち上り退社します。アト一行打ってくれればそのレター今日中に片づくんですのにね。

第2原則　『チリ人の人生の目的は仕事以外にあるものと心得べし』

これも教えられましたね。人生の目的は何かなど難しい問題提起は致しません。日本人とて仕事にのみ生き甲斐を求める人は行き詰る時期がくると言いますからね。特に最近の若者はその点我々の時代より進んでるんではありませんか。私は20年以上も前に最近の日本の若者にチリで接して来たことになります。まあチリ人の殆どと言ってよいでしょうね。如何に人生をエンジョイするかと言うことを中心に日常が回転していると思えばよいですね。

勿論夏のバカンス（南米の夏は12月～2月ですよ。クリスマスは真夏です。）がすむと来年のバカンスの計画を樹てそれを目標に働きます。月曜日の挨拶は「週末はどーしたか。」が挨拶ですね。「どうして日本人は土曜や日曜まで出て働くのか。」と私達よく聞かれたものです。「それは会社を立派にして、その次は我々の生活もよくなるではないか。」と答えても首をかしげるばかり。その頃からチリでは日本の家は狭いそうだな。とよく聞かれたものです。

「成程。日本は国土が狭いんだからナ。家は貴方達より狭いよ。だけど日本の工場に行ってみろ。世界一の設備だぞ。家の狭いくらいは我慢しなきゃ。」と少々鼻をうごめかした私の応答に対する我がAMIGO（アミーゴ）の答えは次でした。

『QUÉ（ケ） SACRIFICIO（サクリフィシオ）』
（何たる犠牲）

たった一行残しても時間がくれば立ち上って退社

する秘書の気持は痛い程よく分るようになって来ました。男でも女でも退社後から、それからほんとうの意義ある人生が始まるんですからね。

（**5時から男のグロンサン！**　というのは　あ、そうですか。意味が違うんですか。もう余りよく分らん世の中になって来ましたナ。）

第3原則　『チリ人はおしゃべりを好む国民と知るべし』

夏の夕暮れともなれば市の中央部にある公園や町角は人出で埋まります。コーヒーショップやビヤホールはいつ果てるともなきおしゃべりに興ずる者の集まりで賑わいます。私も一寸真似しようと思って親子3人アイスクリームをナメナメ歩いていたら散歩中の大使にバッタリ出会って一寸バツが悪かった。

運転手でもボーイでも時間外ともなれば何の差別もない平等な市井人。キチンとネクタイを締め背広を着こなし、まして立派な体格とヒゲまで生やしていれば昼とは見間違うばかり。これがチリの何とも言えぬよいところなんです。

私も赴任当初、夕方、鉱山町のビヤホールで所長と一杯やってました。ヒゲを蓄えた立派な紳士、夫人と覚しき美人と2人づれ。確か見たことがある人。私に向かって軽く会釈。

赴任当初ですから「とに角チリ人には特に礼儀正しく」と私は席を立って握手して来ました。所

チリの家には古い習慣でこのような水ガメがよく置いてある。筆者と家内とこのチリの家のsenorita（セニョリータ）

長「オイ、お前アレ誰か知ってるか。今日飛行場へ迎えてくれた運転手だ。」

いやこれがチリの（いや西欧はすべてそうですかね。）よいところ。日曜日に礼拝に行けば教会の信者の代表は従業員、社長はその指図に従ってということはザラです。よいですね。私はそんな風潮が滲透する社会が正しいと思いますね。

我々は会社の接待でも料亭を使うのが常識ですがAMIGO（アミーゴ）同志ともなれば必ず自宅へ招待します。別段ご馳走するわけではありません。一家総出で歓談するのです。それも夜10時頃から始って。そうですね。夜中の2時頃までが常識です。おしゃべりなのです。サンチャゴのような都市では昼休みが12時から3時頃まで。

従って家族にとっては昼が最も大切な一家団欒の時のようです。ワインを飲んで昼寝して4時頃出社、但し8時頃まで働きます。1日が2つに分れているんですね。だから朝の2時頃まで歓談をやっていても朝はキチンと8時か9時には出社しますよ。昼寝がよいんですね。

日本語は彼等にタカタカとひびくらしい。日本語のことを彼等はタカタカと言います。

タカタカと言えば面白いことがありました。

家内の妹が福岡にいたのですが、九大に留学したチリ人医師の卵が福岡で妹と知り合い「姉夫婦がサンチャゴにいるから。」と帰国の時に託送された物を持って私宅を訪ねてくれました。東京ならともかく福岡でチリ人と知りあうなど珍しいこと

ですからね。

「まあ、ようこそ。日本の印象は？　して妹とどこで知りあったんですか。」

矢継ぎ早の私達の質問にカタコトの日本語で医師の卵のチリ人が答えました。

「ビョーインです。」（アッソーカ、医師、九大、病院）と鋭い直感が働きます。「どこの病院ですか。」頭に手をやって「ビョーイン」との答。（ハア脳病院ダナ。妹は脳が悪いのか）とんがった私の質問に家内は「何も言って来てませんがねー。」とのこと。

少々険悪な空気を察した卵氏、奥さんの頭に手をやりセットの真似をして「アタマ、きれいにする。女の人。」アッソーカ。「美容院」だと判明、事なきを得た次第であります。

第４原則　『チリ人は楽天主義者であり、TRANQUILO（トランキーロ）な生活を好む国民であると知るべし』

南米であてにならないものは**「ボリビヤの法律」「ペルーの男の友情」「チリの女の愛情」**だそうです。深刻に考えるとただならぬ事ですが、これが南米人の楽天主義、陽気な人生生活に染みついた態度風習とでも言うものでしょうか。そうですね。根源はラテン民族の流れなんでしょう。ゲルマン民族の風習とは全く違うんですか。よく知りませんけど。車の運転は私チリで習ったんですが、右側優先だの左折禁止だのどうも規則通りに運転手自体がやっていないので質問しましたら「規則はそうだ。要は事故を避けるようにやればよい。アッハッハ」との答えでした。

チリの落語にこんなのがあるんです。

先生「楽天主義者（オプチミスタ）と悲観主義者（ペッシミスタ）とどう違いますか。」

生徒「はい。土曜日に明日は日曜日だと考える人がオプチミスタ、明後日は月曜日だと考えるのがペシミスタです。」

チリ人は屢々（しばしば）TRANQUILO（トランキーロ）という言葉を好みます。これは静かなとか、穏やかなという意味なんですが（精神安定剤にトランキライザーという

のがありますね。）チリ人にとり何より大切なことはTRANQUILO（トランキーロ）な生活ということなんです。問題のないその日その日を楽しめればよいということであり、考えようによっては、つつましやかな欲望とも言えるのではありませんか。鉄鉱山開発の初期、労働争議があり赴任当初でもあって大変苦労しました。

その時、比較的穏健であり協力的な幹部の一人にベラスケというのがおりましたが、黙って辞表を出し鉱山を去って行ったのです。

争議も収まり１カ年以上もたったある日、私は隣町の空港でタクシーを拾ったらその運転手がベラスケだったのです。「おい、ベラスケじゃないか。」再会の話に夢中になりましたが「お前どーしてあの時やめたんだ。俺は頼みにしてたんだぞ。」という私の問いに対する彼の答えは「何より私はTRANQUILO（トランキーロ）な生活がしたかったんです。」というものでした。

夫婦愛でも恋人同志でもTRANQUILO（トランキーロ）な愛情をあらわす言葉、AMIGO（アミーゴ）から次のようなこと教わりました。

『夫婦愛（恋人同志でも）をあらわす「乾杯」はつぎのように言って杯を重ねます。

Ni	más	que	tú
なく（ニ）	多く（マス）	より（ケ）	お前（トウ）

Ni　más　que　tú
なく　多く　より　お前

Ni　menos　que　tú
なく　少なく　より　お前

Igual　que　tú
同じく　と　お前

（お前より長生きはせんでよいが、お前と同じくらい生きて健康で楽しもう。）ということです。

ちなみに　貴方というのは　Ud
なのですが同じ貴方でも　Tú
という場合があります。

Túという場合は「お前」と訳すのですが、「肉体関係がある場合のみ。」使います。

従って私の場合Túといえるのは家内のみですが、さーて、貴方の場合はいかがでしょうか。

序でにチリ人の乾杯では

（正式）Salud,　Pesetas,　Y
健康　金　そして

Tiempo　para
余裕／時間　ための

gozarlas.
それを楽しむ

（略式）SALUD！　SALUD！
健康を　健康を

と言って杯をあげます。』

人生をEnjoyするためには「健康」と「金」が必要だがそれだけではダメだ。それを楽しむだけの「時間」がなければ意味がないというチリ人の人生観です。その通りではありませんか。

第5原則　『ホラとラッパは大きく吹け。チリ人は見栄ッパリと知るべし』

ホラとラッパに加えて序でにオナラも大きく吹く方が愛嬌があって宜しいですね。チリでは女の子が生まれると皆ミスユニバースが一人増えたような話をしますし、人をほめる時は最上級を使って直接叙法的な表現をとるのが通常です。

だから私も「東京の家は鉄筋コンクリートの2階建てで庭にテニスコートが三面ついている。」と何時も言っていました。別にウソをついたつもりはありません。だって私、会社の巣鴨のアパートにいたんですから。（多少表現に説明不足という嫌いはあったかも知れませんがねー。）

ところがその話をしていた相手弁護士が実は日本に来たんです。これには一寸困りましたがそこは会社の寮を借用うまく切り抜けた次第であります。

夏休みあけには日焼けしてなるべく黒い顔して出社しないと仲間うちで大きな顔はできません。だから別荘を持たぬ人達は玄関口に鍵をかけてベランダで肌を焼くんだそうです。

第6原則　『性急に事を運ぶべからず』

南米がHASTA MAÑANAの国というのはよく聞かれたことがあるでしょう。「何も急いで今日中にやらなくても。」という人生哲学です。競争が少ないわけですから自らそうなるのでしょう。私もカメラの修理を依頼した時これにひっかかって往生した経験があります。借金の引き延ばしにはこれが最適ですね。尤も毎日催促してもニコニコしながら「MAÑANA」と言われれば一寸喧嘩もやりにくいですね。日本人はすぐ深刻な顔して平

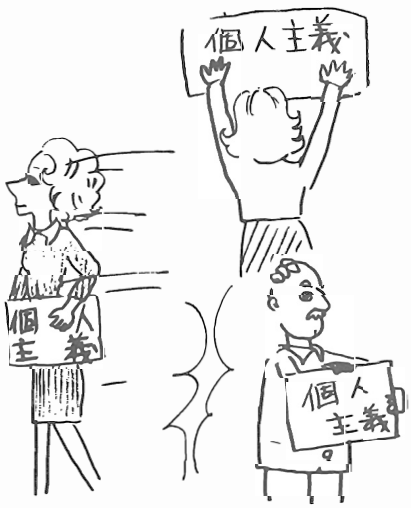
身低頭、真顔で謝るんでしょうね。

第7原則　『チリ人の個人主義は徹底しているものと知るべし』

個人主義でないのは日本が例外で、むしろチリの方が世間並みなのではないかと思いますが面白い例がありました。

チリでは親子同じ名をつけることが多いのですが「最初に名、次に父方の姓、そのあとに母方の姓」をつけるので区別できるわけです。

会社の弁護士にRAUL（名）RENCORET（父の姓）DE LA FUENTE（母方の姓）というのがおりました。その父がやはり弁護士のRAUL RENCORET DONOSOと言いました。ある時弁護士に対する小切手支払いを間違えてRAUL RENCORET DONOSOと書いて渡しました。（いかにも不注意のようですが通常AMIGOともなれば名だけで呼び合うのでどうした風の吹きまわしかキチンと書こうと思って間違えたわけです。）



当然書き直してくれと言って来たので「オヤジではないか。オヤジから貰え。」と言いました。真顔で怒るんですよ。「オヤジはオヤジ、俺は俺、それにあのオヤジに一旦渡したら絶対返してはくれぬ。」というのが回答でありました。断っておきますが、この弁護士父子別に仲たがいしているのではありませんよ。

第8原則　『純粋のチリ人とは』

チリ人とよく話しているうち気付くことは彼等がスペインやポルトガルのことを褒めこそすれ決して悪評はしないということです。女中や庭師など日常の勤務には相当厳しいものがあると思いますがそれでも同様です。

チリは元々他の南米諸国と同じくスペインやポルトガルに占領されたのだから彼等に征服者として反感があって然るべきなのにそうではないことへの疑問でした。

（チリ独立は1818年。スペインがチリに侵入したのは16世紀の初期です。）この謎はやがて解けました。彼等の殆どは自分はスペイン人やドイツ人即ち征服者の子孫であると自負しているのです。だから家系によって「スペイン、クラブ」「フランス、クラブ」「イタリア、クラブ」のようにゴルフ場にプール、テニス、ビリヤードつきのレクリエーションクラブをつくりそれぞれに加入して家族共々生活を楽しんでいるわけです。スポーツはフットボールが1番盛んで野球はありませんでした。南米でフットボールが1番強いのはブラジルと言われていますが、対伯戦に勝った時、子供達の喜びようは大変で各戸毎国旗を掲揚して大騒ぎになりました。どうしてそんなに喜ぶのか会社の会計士に尋ねたところ、この人は大変に出来たオヤジで

「やはりチリ人には伯にコンプレックスがあるのですよ。」と教えてくれたのは印象深い話でした。チリの根底にはやはり１つの哀愁が漂っていると言えるかも知れません。サンチャゴのテニスクラブの正式メンバーにもして貰いましが、日本のクラブと異なるのはハダシの男の子がボール拾いをやってくれます。又、パートナーのいない時は練習相手にもなってくれることでした。ゴルフもキャディーは皆男ですがプレーヤーより先に出てボールの落ちる見当のところで待っていてくれます。私はチリでゴルフを始めたものですから日本に帰り女性のキャディーさんに「先へ行っててくれ」と言ったら大変叱られたことがあります。ゴルフも夏には汗をかくものだとは日本へ帰って始めて知った次第です。

1960年頃のことだったか日本のバスケットチームが親善試合に来ました。予定時間５分前で突然表示時計がストップし何時までたっても試合終了のベルが鳴りません。おかしいではないかという日本側監督の抗議に対するチリ監督の答え。「監督さん。ここのところは何とか５分待って下さい。あと５分すればチリ側が１点入れることになってます。何とか。」と真顔で哀願されたとか。この話真偽は別にして南米人のユーモアが溢れていて面白いと思うのですがどーですか。

そうです。チリ人は大変ジョーク好き。

ある画家の南米紀行にあった話ですが、

日本人「日本の字は上から下に書くんだ。」

チリ人「それでは日本人の目は左右でなく上下についているのか。」

まさか。これは面白いジョークなのでしょうが。私が１番最初にチリを訪れたのはもう30年も前のことですから、日本の浮世絵や江戸時代の風景画を見て『これが日本のどこかに現存すること。』を連想するチリ人がおりました。これはほんとの話です。

エピローグ

― 水と自由と安全のコスト ―

真面目な批判はともかく私には人生を楽しむ楽天主義とMAÑANA（マニャーナ）の生活態度には種々考えさせられるものがありました。自分達に欠けているから尚一層感じたのでありましょう。

丁度私が滞在していた頃、ベストセラーになったイザヤペンダサンの『日本人とユダヤ人』という本に「日本人は水と自由と安全がタダだと思っている。」と痛烈な批判がありました。

外国に生活していると最近のイラク問題にも見られるように外国人としての生活の安全を最終的には誰が守ってくれるのか思い知らされる機会は多いものです。

しかし私がいた1960年代のチリは「水と自由と安全」はタダではないかと思えるようなところがあったのではないか。それから30年、チリでも保守政権から社会主義政権、そして軍事政権そして再び民政に移管されていますが、その間に自由の名の下に流された血は少ないものではなかったと思います。やはり水と自由と安全はタダではなかったのではないでしょうか。

しかしチリの自然と地理そしてそこに人生を楽しむチリ人の魂の変化は政治の改革よりも乏しいのではないでしょうか。

それと共に「水と自由と安全」にはコストがかかるものだという二律背反的行動規範に多くのことを考えさせられる今日この頃であります。

塩　梅

仙台地裁・仙台家裁調停委員
元日本専売公社青森営業所長
菅野　求

塩梅――アンバイ――という言葉は、現代では案配・按配・按俳などと同義語として扱われている。①味かげん、②からだや物事のぐあい、③ほどよくならべること、④適当に処理することなどの意味が明確に区分されずに使われることが多い。

この塩梅という文字が中国で使われたのは古く、「書経」（説命下）に、若作和羹、爾惟鹽梅（若し和羹を作らば、爾は惟塩梅）

とあり、殷の高宗が賢人傅説を得て相に任じた時、告げ命じた言葉として記されている。和羹とはよく味の調和した汁のことでこれを直訳すると＜和羹を作るならば――塩梅――すなわち塩と酢の味を用いる＞となるが、政治に関しては、＜物事をほどよく調和・加減し、塩梅（エンバイ）よろしく我を補佐してくれ＞と説に命じたものと解される。

殷は、考古学的に実証し得る最初の王朝とされ、高宗の時代は紀元前約1300年頃と考えられている。この時期に、既に塩梅という言葉があったとすれば、いかに塩が古くから味加減の基本になっていたかがわかる。

日葡辞書にも「アンバイ－Ambaiすなわちエンバイ－Yembai、料理の加減」とあるし、日本の古い説話を集めた古今著聞集の中にも「上人みづから塩梅（エンバイ）を和して、その魚の味を試て」とあるので、本来はエンバイと読むのが正しいのかもしれない。

このエンバイが、いつ頃からどのような経緯でアンバイに変化したのかというと、大体わが国の中世末期（室町時代）から近世初頭（安土桃山時代）にかけての時期に、冒頭に掲げた「案配」・「按配」・「按俳」などの言葉との混同によるもの……という説が有力である。

「按配」にしろ「按俳」にしろ、元来は全く別の言葉であるし、それらは＜ほどよく並べたり、ほどよく処理する＞場合に使われていた。ところが、世の中が乱れはじめると、言語の世界にも混乱が生じ、味加減に使われていたエンバイが、いつのまにかアンバイに吸収されはじめ、とうとう按配＝塩梅＝按俳になってしまったようである。

しかし、発音では吸収合併された塩梅だがその生命源である語意に関しては主導権を失わず、日葡辞書にもはっきり“料理の加減”として記録されたのは流石である。

「塩梅」と「按俳」の両語を関連させて用いた例として、中国の詩人・黄山谷の作に

春工調、物似、塩梅、　　丨丨根中生意回
風日安俳催、歳換　　丹青次第与、花開

というのがある。春の穏やかで美しい景観を詩ったものであるが、程よい味加減や配列の妙を風景に折り込んで表現した感覚は冴えている。

私の生れ故郷は青森・津軽である。津軽には＜いい塩梅・蟹塩梅＞という語があるが、発音どおりに書けば＜イイアンベ、ガニアンベ＞となる。もともと津軽弁は難解極まりないといわれるが、字に替えるとそんなでもない。この＜イイアンベ、ガニアンベ＞の意味は＜いい味加減だ。蟹の味以上だ＞というところだろうか。津軽半島にある蟹田の近くでとれる蟹は、小型ながら北海道の毛蟹に劣らない美味なそれであり、毎年４月下旬から５月中旬にかけてびっしりと子を孕んだ蟹を塩煮して殻付のまま噛じる楽しみを、津軽人たちは最高の贅沢な味だと思っていた。

この言葉は、味覚だけでなく物事の具合が好調な場合――特に予期した以上に成果を得たときなど、＜イイアンベダ、ガニアンベダジャ＞と喜ぶのである。蟹田の蟹も戦後の乱獲によって最近はあまり姿を見られなくなったが、その代替として北海道から生きた毛蟹が空送され、まことに眼がとび出るような高価な味を津軽人は甘受せざるを得なくなった。

津軽人は、昔以上に＜いい塩梅、蟹塩梅＞の切実な実感を味わっていることだろう。

さて、方言の話が出たので、この塩梅に関する全国的な比較をして見たい。所変われば品変るの譬どおり、次の表に出てくる方言は種々雑多な発音・語意を有しており興味深い。

これを見ると、本州の日本海側に万遍なく分布して使われていることと、京都・大阪・奈良などの都を中心とした地域で多く使われていることが判る。昔から貿易や漁業のための港を媒介にして、言葉の交流が行われた証左ともいえるし、諸国から人が集り政治や文化の栄えた都市で、言語文化の層が育成されたことを物語っている。

「塩梅」方言比較表

順号	発音・語意	府県名(地方名)	使用される一例
1	「あんばい」 味付をすること	香川	「あんばい」する。
2	「えんばい」 塩加減	島根（益田）	この「えんばい」薄くなかと
3	「あんべ」 都合	島根	お前の「あんべ」さよけりゃ出かけよか
4	「あんばい」 病気	新潟 愛知（碧海）	あいつ「あしんばい」だったとよ
5	「あんびあ」 病気	島根（八束）	「あんびあ」じゃしょうがなか
6	「あんべ」 物事の加減・具合	宮城（石巻）	この車の乗り「あんべ」わりいぞ

7	「あんべい」看病とか病人のめんどうを見ること	群馬（勢多） 埼玉（秩父）	妹の「あんべい」で疲れた
8	「あんべい」 女を愛人として養うこと	埼玉（秩父）	あの人の「あんべい」知ってるか
9	「あんばいする」 整理すること	三重（伊賀）	よう「あんばい」しとけ
10	「あんばいする」 修理すること	奈良（南大和）	「あんばい」しねえと使えんな
11	「あんびゃー」 結構・見事	京都（竹野）	この庭ほんまに「あんびゃー」や
12	「あんばい」 すっかり、まんまと	三重（名張） 奈良（南大和）	「あんばい」癒った 「あんばい」欺された
13	「やんべー」 「やんびゅー」 うまく、じょうずに、ていねいに、よい具合に、都合よく	京都、大阪 兵庫（明石）（神戸） 和歌山 奈良（南大和） 奈良（吉野） 徳島（海部）	「やんべー」火を見ておけ もちっと「やんべー」に片付けろ 「やんびゅー」会えてよかった
14	「やんべ」「やんびゃ」 「やんばい」 いいかげんなさま でたらめなさま	鳥取（西伯） 島根（出雲）	この豆腐は「やんべ」な出来だ その仕事は「やんびゃ」でよい
15	「やんばー」 いい気味	新潟（佐渡）	落選したか「やんべー」だ
16	「あんばいこかす」 時機を失する	山形（東村山）	ほんとに「あんばいこかし」たな
17	「あんばいごー」 慌てること	静岡	そんなに「あんばいごー」してどこへ行く
18	「あんべ」 調子	青森	このテレビ「あんべ」よぐね
19	「あんべみ」 味見、試食、試飲	岩手（九戸） 山形	いま一度「あんべみ」してみろ
20	「あんばい」 田楽	京都 大阪	田楽豆腐を「あんばいよし」と売り歩いた
21	「あんばいみ」 「あんべみ」 試し こころみ	青森（三戸、上北） 宮城（石巻） 岩手（上閉伊） 新潟（佐渡） 富山、宮崎	・よく「あんばいみ」しねえと心配だ ・念には念を入れて「あんべみ」した方がいい ・「あんばいみ」してみて駄目なら諦めろ

（注）本表は『日本方言大辞典』その他の文献を参照にした。

語意については、料理の加減とか、体の具合などが多いのは当然であるが、⑧の埼玉県秩父の（女を愛人として養う）とか、⑩の奈良南大和の（修理する）とか、⑭の鳥取・島根の（でたらめ）とか、⑮の新潟佐渡の（いい気味）などが面白い。

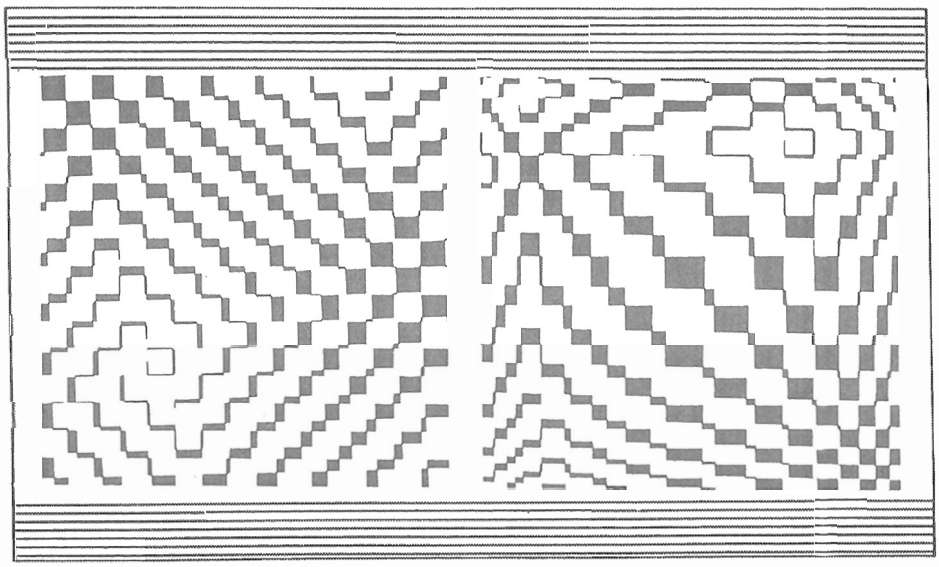
特に秀逸なのは秩父の方言であろう。表面＜アンバイ＞という同じ発音でありながら、一方では（病人の面倒をみる）という意味で使い、他方では（女を愛人として養う）という全く別な言葉として用いているから戸惑ってしまう。多分、“世話をする”という俗っぽいニュアンスが混合しているのだろうが、この地方の人達にとっては、アンバイなんて言葉は死語にして葬り去りたい存在なのではあるまいか。

また、新潟・佐渡島の（いい気味――ざまみろ）という軽べつ・罵倒の意味をこめた使い方は異色である。勿論、この場合＜アンベー＞ではなく＜ヤンベー＞となっており、真意の程はわからない。推測するに、憎ったらしい相手が失敗したり挫折すると、(溜飲を下げる――不愉快な気持が去って、せいせいする)ことから、(具合がいい、加減がいい）に転じたのではなかろうか。

波風荒い離島、流人処刑に明け暮れる土地で、味加減はともかく自分の生活圏をしっかり守り抜くことが大事な日々、そこでは塩梅のいいことが最大最良の倫理だったに違いない。

言葉が訴える人間の哀愁とは、永遠の謎なのかもしれない。今から3500年も前に使われた「塩梅」(エンバイ)という言葉を回顧し、その流転の軌跡を辿ることも全く無意味なことではないと思う。

最後に付記したいことは、未来永劫――少なくとも地球が生き続ける限り、人類にとって欠くことの出来ない「塩梅」（アンバイ・エンバイ）の恩恵を、ソルト・サイエンス研究財団とともに、いつまでも大事にかみしめたいと念願してやまない。



沢田遺跡

―伝説「千々乱風」の舞台―

塩元売協同組合
副理事長　今城　彰男

茨城県那珂湊市阿子ケ浦町青塚、同地区は江戸時代初期に75日にわたり砂嵐が吹き荒れ、三つの村が砂に埋もれたという「千々乱風」伝説が残っていた所であり茨城県教育財団が、その遺跡を発掘した結果、室町後期から明治初期にかけての国内最大級の揚げ浜式の製塩跡であることがわかった。

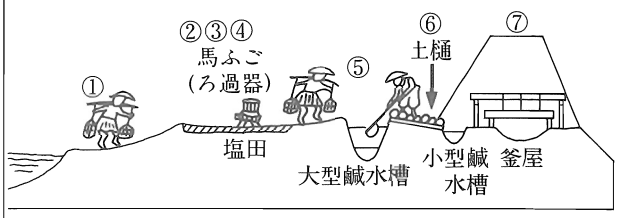
4年間にわたって沢田川河口部をややさかのぼった砂丘地帯11.1ヘクタールを調査した結果、東西約120メートル、南北約920メートルに点在する製塩跡が確認された。

4年間にわたって出土した遺構は、釜屋が93カ所、鹹水槽949基、土樋237条、炉43基などとなっており海浜に広がった大製塩跡であることが立証された。

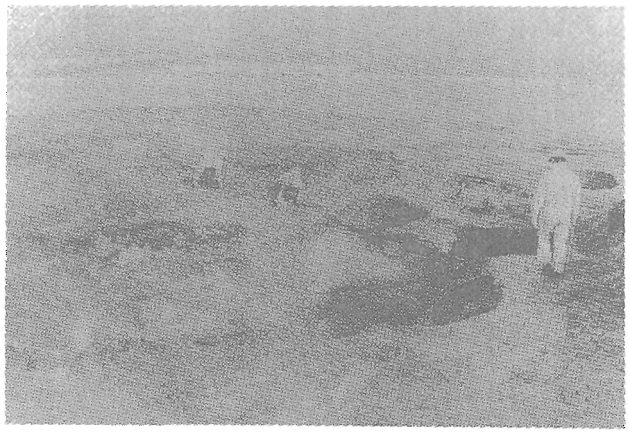
こうした製塩跡が大規模に発掘された例は全国でもなく当時の揚げ浜式製塩の様子を詳しく知ることのできる一級の資料として平成2年11月17日に公開された。

なお、遺品より時代を特定できるだけのものはなく、釜家近くの高温で焼かれた砂を分析依頼し遺跡の時代を特定する作業を来年度以降に行う方針とのことである。

沢田遺跡揚浜式塩田構造予想図



①海水を汲む　②海水を塩田にまく　③鹹砂を集める
④鹹水をとる　⑤鹹水を溜める　⑥鹹水を釜屋へ送る
⑦鹹水を煮つめて塩をつくる



公開された沢田遺跡　(茨城新聞、平成2年11月17日付)

塩を売る

日本精塩㈱
取締役社長　鈴木　清

黙っていては売れない

実りの秋、各地でお祭りやイベントがあり、縁日のように店が出て宣伝販売も盛んである。塩についても各塩業センターや元売各社の企画によるコーナーが設けられ、即売に精を出している。

私も専売を退職後、現在の会社で「新入り」として早速塩売りに出かけた。５年前「赤羽ばかまつり」である。

揃いのユニフォームを着て、塩を山のように飾りつけ、さらに目立つように印半てんを引っかけたりして待ちかまえる。通行人の流れは結構多いのだが、こっちを一べつして通り過ぎてゆくばかり。黙って見とれている間、誰も買いに来ない。だんだん焦りの心境で「寄って見て欲しい、この塩を手にとって欲しい」は言いたいが、ノドがつかえたように声が出てこないのが情けない。一緒に立っている「塩売りの先輩」をマネして、開き直ってやっとひと声……こちらを振り向き近づく人は本当に嬉しい。「お客様は神様」と感じる。

商品説明を一気にしゃべったり、「普通の塩とどう違うか」など質問してくるお客様と少しずつ対話ができる。通行人の目と目が合ったり、買ってくれそうな客の見分けも感じがつかめてくる。このような外へ出ての塩売りの回を重ねると、話を交わした客の大半はお買上げとなってゆく。

ところで、塩という商品は黙っていても客が買いにくるものか？　という思いが残る。本誌の読者ならば必需品と確信しておられると思うし、私も同じ考えである。すると、客の方に塩を買う動機があると考えると、塩の売り方といかに合わせるのか工夫が要るようだ。

いま、家庭で塩が無くなったら直ぐ買いに走るのだろうか。

戦前は「塩を切らすのは恥」という考えがゆきわたっていたが、現在は死語に近いように思える。

塩を必需品とみるか、調味料の一つか、健康食品的商品か、さまざまな見方ができる。

塩は無くてもよい？

『そるえんす』第５号に関心をそそる文が載っていた。鈴木教授の巻頭言「根源的必需財としての塩」に敗戦時のフィリピンで「塩がなくては生きていけないと、コメよりも塩を大量に運んで山へ潜んだ。そのお蔭で食物と交換でき、飢えに苦しまなかった。」という話で、まさに生活の必需品であった。

次に「たばこと塩の博物館」の半田学芸員が体験した話で、さる臨床医学の権威の先生が「高血圧、心臓病と血管障害の原因は塩にある。人間は塩を食べなくても健康を維持できる云々」に面食った由。まことに極端な意見に驚かされる。当社へ見学に来られる主婦の方々からも「塩を食べることは身体にドク」と言わんばかりの発言があり、塩についての知識のPRが一層必要だと感じさせられた。

また水沼先生も減塩ということの多角的な見方を説いておられる。減塩の風潮はマスコミと女性に多いようで、これも塩売りにとっておろそかにできないし解説も必要となろう。

本当に塩は無くてもよいものなのか。半田学芸員の別の紹介では、東北地方で減塩を進めたところ、農村の働き盛りの人達の「無気力症候群」が問題になったそうである。

グアム島の横井さん

そこで、あのグアム島で28年間、ほとんど孤独な生き方を強いられた横井さんと塩との関係を調べてみた。

著書によると、彼は熱帯の森林内で植物、木の実、野生動物を採ったりする自給自足の生活であった。彼はもともと愛知県の洋服屋で、必要に迫られ小道具をつくり、衣服を木の皮から織り、火を起こし、穴居住宅を手造りで６回も築いている。まさに現代のロビンソン・クルーソーとも言えるサバイバルの代表である。

毒ガマを飼って話し相手にしたり、その肝や油を薬代りにしたり、慎重で楽天的、悲愴感よりも生活の知恵を働かせた、したたかな精神の持主と感服した。

塩についての彼の考え方は、欲しいが海水を汲みに行くのは見つかる危険が一杯、また野生の動物が塩や海水を食べていないのを見て、「塩が無くても生きてゆけると信じる」ことで通してきた。

昭和47年に「発見」された時、質問に答えて「何も無かったから生き延びられたと思う。頼むから私に呉れ！　と言いたかったもの――それはなんと言っても塩です。耳かき一さじでもいいから塩が欲しかったと何度思ったか知れません。海水を汲みにゆくのは危険で無謀、塩は諦めました。

28年間、ほとんど全く塩の無い生活を続けてきた。しかし一日たりとも塩が欲しいと思わない日はありませんでした。」と強い願望を述べている。

（横井庄一：『無事がいちばん』1983年より）

この横井さんの体験を、塩は無くてもすむものか、やはり必需品と考えるかは意見が分かれるであろうし、結論をしぼることはできない。

実用品として

塩で頭をマッサージする話を聞かれたことがありますか？　弊社の近くの美容院では、パリで習得した方法として、洗髪時に頭の地肌に塩を摺り込むくらいにマッサージした後ぬるま湯ですすぎ、最後に冷水で仕上げる。続けてゆくと髪も自然にしっとりして来て、白髪の予防になるという。塩はにがり入りが特に良いとか。来院の女性客にも分けており、定期的に注文を頂いて数年になる。

これは特異な例であるが、日本たばこ産業で作成された塩のいろいろな使い方もあり、またトーストパンにバターと塩を付けたり、砂糖を控えたコーヒーを更に進めて塩味で頂くのも独特の風味がある。なおヨーロッパでは、塩とコーヒーと言うのは吐瀉剤として考えられているそうで、好みにもよると思いますが。

口に入れば「塩は塩」とも言われるが、普通の塩と比べて大きい結晶をミルで挽いた塩味がおいしいと、遠くから送料を添えて注文を頂くお得意様もある。

塩の利用や効用をどんどんPRすると共に、用途に応じた商品企画も必要となる。例えば塩を主にした入浴剤や家庭での融雪、除草、また㈱マリン・テックでも人工海水のほか盛り塩、型塩の商品化など市場の開拓に努めている。

塩の需要をもっと掘り起こして売ってゆく上で、必需品という面だけでなく、便利な実用品という身近なものと訴え、家庭で塩を切らすことがないようにしてゆきたいと願っている。

平成３年開催の第３回研究発表会の開催日と会場が決定

去る９月20日に開催された第５回研究運営審議会において、平成３年に開催する第３回研究発表会は次のとおり行うことが決定されました。

なお、詳細は時期が近くなりましたら別途お知らせします。

１．期　日　　平成３年７月23日（火）
２．会　場　　日本都市センター
　　東京都千代田区平河町2-4-1
　　電話　03-3265-8211

第７回国際塩シンポジウムの準備状況

平成４年４月に京都で開催予定の第７回国際塩シンポジウムの準備は、本年４月に同シンポジウムの大会運営委員会が発足し、各委員会が中心となって大会開催に向けて諸準備を進めております。11月までの準備の状況は次のとおりですのでお知らせします。(本誌第５号掲載の同シンポジウムの解説記事もご参照ください。)

１．委員会の開催状況

平成２年５月22日　第１回組織委員会
　　５月23日　第１回実行委員会
　　７月11日　第１回プログラム委員会
　　７月31日　第２回実行委員会
　　９月５日　第２回プログラム委員会
　　10月16日　第３回プログラム委員会
　　10月25日　第３回実行委員会

２．主な決定事項

(1)　開催日程

月　日	午　前	午　後	夜
平成４年 ４月６日(月)	―――	登録・開会式	レセプション
７日(火)	基調講演	研究発表	バンケット
８日(水)	研究発表	研究発表	
９日(木)	研究発表	研究発表・閉会式	送別会

(2) 論文発表関係

・編集委員会の設置

・スケジュール

論文要旨受付	平成２年10月～平成３年２月
論文要旨審査	〃 ３年３月～５月
論文原稿提出	〃 ３年６月～12月
論文原稿査続・修正	〃 ４年１月～６月
研究報告集（プロシーディング）出版	〃 ５年３月

(3) 案内状

・第１回　平成２年11月発行　　英 語 版（掲載省略）

日本語版（31頁～42頁に掲載）

内容　挨拶、開催概要、論文募集

・第２回　（平成３年６月発行予定）

内容　開催日程、プログラム、登録、宿泊、ツアー等の申し込み

・第３回　（平成３年12月発行予定）

内容　招待講演および研究発表プログラム、ソシャルプログラム等

(4) 寄附金

寄附金募集　平成２年11月から開始

３．広報関係

(1) 国内紙への記者発表　平成２年７月

(2) 専門誌等への記事掲載依頼　平成２年10月

４．当面の主な検討事項

(1) 招待講演

日、米、欧から各１名で、演題、演者は選定中

(2) 編集委員会

論文の審査・査読と研究報告集（プロシーディング）の編集を担当

主業分野の専門家を中心に10名程度を予定、平成３年１月末を目途に人選中

(3) 分野責任者（セッション・リーダー）

部門監理者（セクション・マネージャー）に依頼し、本年12月末までに選定予定

(4) 見学会など

シンポジウム開催日程後を中心に検討中

５．各種委員会等

氏名および役職（29頁に掲載）

６．予告（プレリミナリー・アナウンスメント）の返信状況

(1) 発送通数　約2,700通（外国2,000通、国内700通）

(2) 返信件数　約270件　（外国200件、国内70件）

（内訳）

研究発表希望	約140件（外国100件、国内40件）
出席希望等	約130件（外国100件、国内30件）

第7回国際塩シンポジウム各種委員

(英文名アルファベット順、敬称略)

(大会顧問)

ド・ボルデス	前ヨーロッパ塩研究委員会会長
伊東正義	㈳日本塩工業会会長
水野　繁	日本たばこ産業㈱社長
垣花秀武	上智大学教授
杉　二郎	東京農業大学名誉教授

(組織委員会)

大会会長	園部秀男	㈶ソルト・サイエンス研究財団理事長
大会副会長	枝吉清種	日本たばこ産業㈱塩専売事業本部長
同	前囿利治	㈳日本塩工業会副会長
委員	フィーデルマン	溶解採鉱研究協会代表
同	古本次郎	日本ソーダ工業会会長
同	ハンネマン	アメリカ塩協会理事長
同	河村　學	㈳日本塩工業会専務理事
同	木村尚史	日本海水学会会長
同	クネジツェク	ヨーロッパ塩研究委員会会長
同	コスティック	アメリカ内務省鉱山局代表
同	田村哲朗	日本たばこ産業㈱塩専売事業本部部長
同	武本長昭	実行委員長

(実行委員会)

委員長	武本長昭	㈶ソルト・サイエンス研究財団専務理事
事務局長	橋本壽夫	日本たばこ産業㈱塩専売事業本部調査役
委員	浅野　譲	㈳日本塩工業会技術部会長
同	バートラム	アメリカ塩協会技術部長
同	川原拓夫	旭硝子㈱膜プロセス部長
同	水崎茂暢	日本たばこ産業㈱海水総合研究所所長
同	モニエ	ヨーロッパ塩研究委員会事務局長
同	尾方　昇	㈳日本塩工業会技術部長
同	大野正之	日本たばこ産業㈱塩技術調査室長
同	大矢晴彦	日本海水学会副会長
同	山中弘久	日本食塩製造㈱社長
同	長谷川允紀	総務委員長

(プログラム委員会)

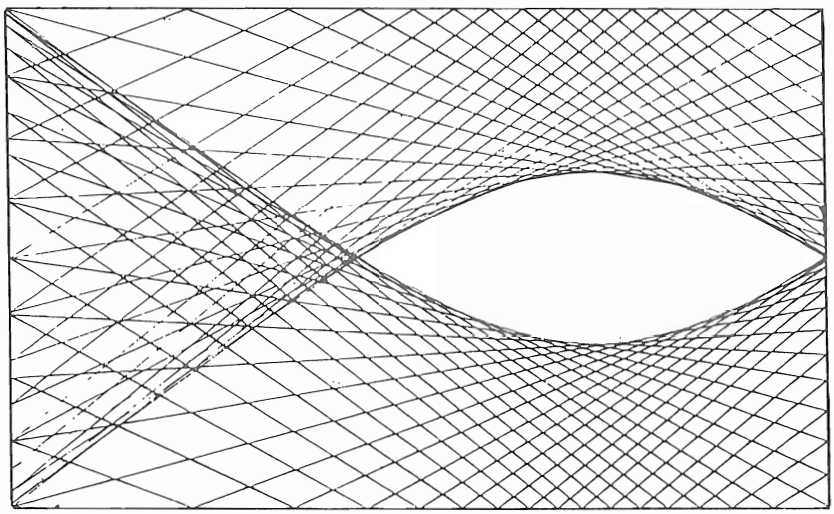
委員長	橋本壽夫	日本たばこ産業㈱塩専売事業本部調査役
副委員長	バートラム	アメリカ塩協会技術部長
同	モニエ	ヨーロッパ塩研究委員会事務局長

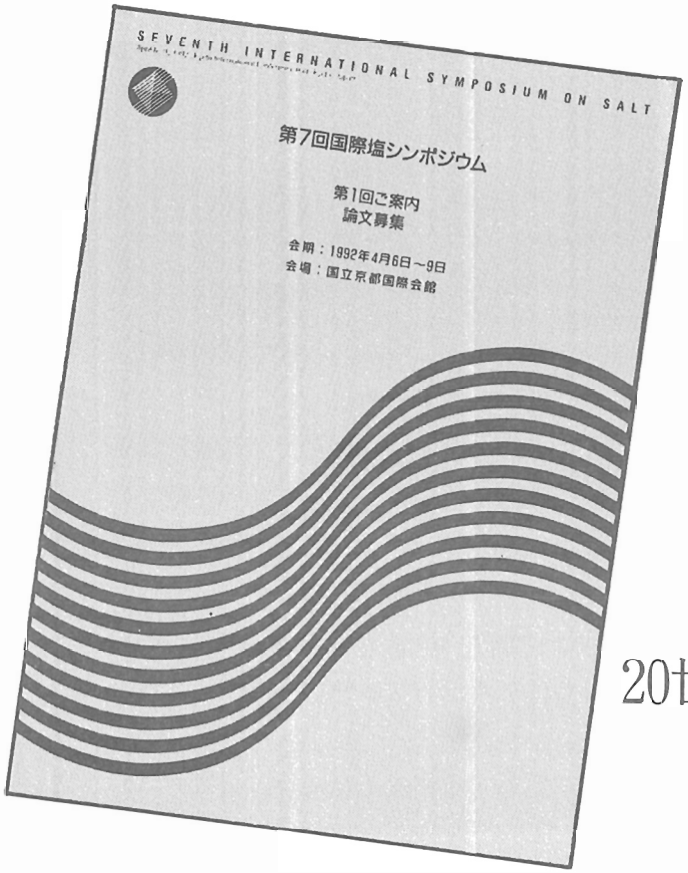
委員

セクション1	委員長	ハーディ	ペンシルバニア州立大学教授
	副委員長	端山好和	東京農業大学教授
	同	シュミット	ドイツ・ゾルベイヴエルケ社鉱山担当役員
セクション2	委員長	セラタ	セラタ・ジオメカニクス社社長
	副委員長	中西康堯	旭硝子㈱大網白里鉱業所鉱山課長
	同	ワスマン	アクゾ塩・基幹薬品社無機物部長
セクション3	委員長	豊倉　賢	早稲田大学教授
	副委員長	ダイヤモンド	モルトン・インターショナル社 環境・溶解採鉱技術担当役員
	同	コーラス	CSME社副社長
セクション4	委員長	星　　猛	静岡県立大学教授
	副委員長	トンプソン	アクゾ・ソルト社筆頭副社長
	同	ルフト	フリードリッヒ　アレクサンダー大学教授
セクション5	委員長	尾方　昇	㈳日本塩工業会技術部長
	副委員長	サリバン	ノースアメリカンソルト社副社長
	同	ビアマン	アクゾ塩・基幹薬品社副社長

（総務委員会）

委員長	長谷川允紀	日本たばこ産業㈱塩技術調査室調査役
委員	小林研司	㈶ソルト・サイエンス研究財団事務局長
同	吉岡利輔	日本たばこ産業㈱塩技術調査室調査役





Salt '92
20世紀から21世紀へ向けた科学、産業の挑戦

21世紀に向けて現在私達は外的問題として、新エネルギーの開発、環境保全、資源確保等解決していかなければならない数多くの問題をかかえており、一方、内的問題として食生活とも関連する塩と健康との問題が議論されています。

このような中で、第7回国際塩シンポジウム(Salt '92) が1992年4月6日から同9日まで、国立京都国際会館で開催されます。

Salt '92では、地質、採鉱、製塩技術、健康問題、マーケティング等塩に関する最近の諸問題について検討するために、学会、産業界から幅広いご参加をいただき、経験と叡知により来るべき21世紀に向けて、一段の科学、産業の飛躍を図る機会にしたいと願っています。

この度、第１回目のご案内として当シンポジウムの概要と論文募集のお知らせをいたします。皆様の積極的なご参加を期待しています。

SEVENTH INTERNATIONAL

第7回国際塩シンポジウムへのお誘い

（共催団体英語名アルファベット順）

園部　秀男

第７回国際塩シンポジウム開催のお世話をする関係者を代表して、参加者の皆様に歓迎のご挨拶を申し上げます。

このシンポジウムは塩に関する唯一の国際会議で、1962年に米国のクリーブランドで最初に開催されて以来、これまでに６回開催されています。今回は30周年にあたり、またアジア地区では初めての大会であります。

今回シンポジウムを日本で開催するにあたり、私達は塩の科学や産業に関する幅広いテーマを扱うプログラムを用意し、楽しい雰囲気の中で共に学び、交流を深める場を作りたいと思っています。又京都では、桜の最も美しい時期でもあり、同伴者の方々には、古都京都・奈良を充分に楽しんでいただくツアーなども用意しています。

多くの方々にご参加いただき、21世紀に向けてこのシンポジウムが、塩にかかわる科学、技術、産業の発展に寄与することを心から願ってやみません。

園部秀男

第７回国際塩シンポジウム　大会会長
財団法人ソルト・サイエンス研究財団　理事長

SYMPOSIUM ON SALT

Gerhard Knezicek

Life is salt.

Life has proved not to be so simple from the origins. And getting salt was sometimes difficult. Salt mining by the Celts 3000 yesrs ago was a big challenge. Production techniques have changed since that time. The success of European engineers was assured only in the 19th century by a significant innovation, deep drilling. The Chinese had accomplished deep drilling over a millennium earlier·····.

New outlets have been developed. And salt production has continued to increase exponentially. At the beginning of our era most of the salt available was used as foodstuff or for food preservation. Today sodium chloride is presumably the most important raw material of the chemical industry. Food grade salt does no longer exceed ten per cent of our requirements.

Salt is essential to human survival. Even if dietary salt intake could be identified as having an incidence on blood pressure, at least in salt sensitive people, the general applicability of further restriction and its long-term effects in the population at large are unknown. Used as carrier of iodine, fluoride and other nutrients, salt makes prevention of certain disorders easier.

Salt is life.

Gerhard Knezicek
Chairman, European Committee
for the Study of Salt.
(Co-sponsor of Europe)

SEVENTH INTERNATIONAL

Richard L. Hanneman

The Salt Institute is pleased to join in inviting you -- and in encouraging you -- to contribute to the Seventh International Symposium on Salt by attending April 6 - 9, 1992.

This periodic assemblage of the world's foremost authorities on all aspects of production, distribution and uses of sodium chloride makes available a truly unique opportunity for professional enrichment and advancement.

Those of us who participate will:

A. Learn state-of-the-art techniques and developments concerning all important aspects of our business;

B. Focus on advancements in knowledge with profound implications for our future;

C. Exchange practical information with the most outstanding authorities in the world; and

D. Enjoy social fellowship with our colleagues and tour the historic, fascinating and picturesque city of Kyoto.

Program planners are working diligently to develop the most substantive and beneficial agenda possible. Their conscientious efforts will culminate in a summit conference that represents what is for most of us a once-in a lifetime opportunity.

So many changes have occurred in our business since 1983, when the Sixth Symposium took place, that participation in the Seventh could be accurately characterized as "essential."

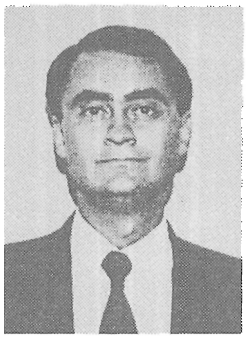
Please make a special effort to attend the Seventh International Symposium on Salt. The costs are small and the benefits most assuredly will be immense.

I look forward to seeing you in Kyoto in 1992.

Richard L. Hanneman

Richard L. Hanneman
President, Salt Institute (Co-sponsor of U.S.A.)

SYMPOSIUM ON SALT



Charles R. Chabannes

The Solution Mining Research Institute is pleased to be a co-sponsor of the 7th International Symposium on Salt.

We would like to encourage you to attend this meeting to be held in the beautiful city of Kyoto, Japan from April 6 to 9, 1992.

The previous six salt symposiums have proved to be very successful in offering broad programs covering all aspects of the salt industry. The program being planned follows in the tradition of the past salt symposiums. In addition to the strong technical program being planned, there will also be many sightseeing opportunities.

We hope you can participate in this important conference.

Charles R. Chabannes

Charles R. Chabannes
President, Solution Mining Research Institute, Inc. (Co-sponsor of U.S.A.)

SEVENTH INTERNATIONAL

運営組織

●主　　催　財団法人ソルト・サイエンス研究財団

●共　　催　ヨーロッパ塩研究委員会　アメリカ塩協会
日本ソーダ工業会　アメリカ溶解採鉱研究協会
日本たばこ産業株式会社　日本塩工業会
(英文名アルファベット順)

●協力団体　全日本塩販売協会　塩元売協同組合
全国輸入塩加工包装協同組合　日本海水学会
たばこ産業弘済会　アメリカ内務省鉱山局
塩輸送元請協会
(英文名アルファベット順)

●大会運営組織
大会顧問、組織委員会、実行委員会、プログラム委員会、総務委員会

●大会会長
園部　秀男　財団法人ソルト・サイエンス研究財団理事長

●会議の構成
基調講演、一般研究発表

SYMPOSIUM ON SALT

主要議題

Section 堆積物、地質構造学、地球化学と鉱物学、蒸発沈殿鉱物、乾式採鉱と安全衛生

Section 空洞造成（溶解理論、試掘、物理探査、井戸造成を含む）空洞利用、陥没

Section 天日製塩、加熱蒸発製塩と加工技術(晶析、省エネルギーを含む)、海水脱塩と副産物（苦汁利用を含む)、海水化学（電気透析、溶存資源利用を含む)、天日塩田の微生物管理

Section ナトリウム・その他電解質と高血圧、塩・添加物と栄養、塩の生理的役割、食塩欲求、食塩と疫学研究

Section 塩の歴史(技術的、行政的問題を含む)、塩市場の展望、塩の品質・分析・規格(化学工業用、食用)、ソーラーポンドによるエネルギー生成、融氷雪、塩性土壌と植物栽培（耐塩性植物を含む)、食品加工の塩利用（塩代替物を含む）

SEVENTH INTERNATIONAL

論文募集

●論文募集要領

(1) アブストラクトの提出
論文発表を希望される方は、添付の"Call for Papers"用紙に記入し、所定の様式のアブストラクト(英語)を添付して事務局長宛提出して下さい。

(2) アブストラクトの受付締切
1991年2月28日

(3) アブストラクトの審査
委員会で審査し結果を通知します。

(4) 論文原稿の提出
論文原稿は、1991年12月10日までに事務局長宛提出していただきます。

(5) プロシーディングの発行
論文は、エルゼビア・サイエンス・パブリッシャーズ社からプロシーディングとして出版の予定です。

(6) その他、論文募集の詳細は、"Call for Papers"の記載事項を参照して下さい。

〈アブストラクトの提出先〉

〒100 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル8階
日本たばこ産業株式会社塩専売事業本部気付
第7回国際塩シンポジウム事務局
事務局長　橋本　壽夫
TEL：03-592-8470
FAX：03-595-2429又は03-592-8470
(注)1991年1月1日から電話及びファックスの番号が次のように変更になります。
TEL：03-3592-8470　FAX：03-3595-2429又は03-3592-8470

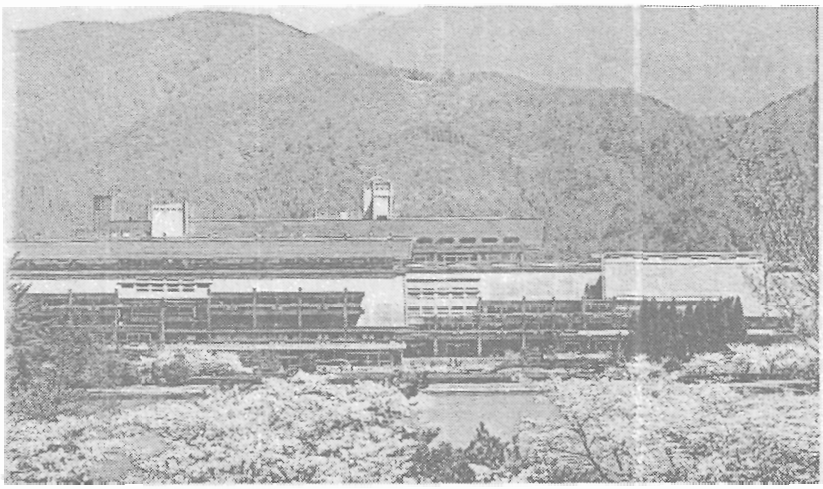
SYMPOSIUM ON SALT

開催概要

●会議名称　第7回国際塩シンポジウム
Seventh International Symposium on Salt

●会　　期　1992年4月6日(月)～4月9日(木)の4日間

●会　　場　国立京都国際会館
京都市左京区宝ヶ池



コンベンション都市京都、その洛北の景勝地宝ヶ池畔に、国立京都国際会館が国内はもとより世界の人々の会議の殿堂として、静かに永劫の輝きをはなっています。また、伝統的な合掌造りの様式を現代建築に生かした、現代を代表するすばらしい建造物として定評のあるところです。1966年5月に開館して以来、毎年各分野の国際会議、国内会議が開催され、その実績は内外で高く評価されています。

SEVENTH INTERNATIONAL

●会議公用語　英語

●参加登録料

	平成4年1月31日以前	平成4年2月1日以降
会議参加者	50,000円	60,000円
同　伴　者	30,000円	40,000円
学　　生	30,000円	40,000円

(注)・参加登録申込み用紙は、来年6月発行予定の“第2回ご案内”に添付します。
・参加登録料は、経済変動等で変更することがあります。

●ソシャル・プログラム

会期中に歓迎レセプション、バンケット、送別パーティー、同伴者プログラム等を予定し、会期後には、テクニカル・ツアーを予定しています。

なお、これらプログラムの詳細及び申込方法等は、来年6月発行予定の“第2回ご案内”でお知らせします。

●展示

科学技術、ペーパー・クラフト等の展示を予定しています。

SYMPOSIUM ON SALT

●本シンポジウムに関するお問い合わせ先

〒100 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル8階
日本たばこ産業株式会社塩専売事業本部気付
第7回国際塩シンポジウム事務局
TEL：03-592-8470
FAX：03-595-2429又は03-592-8470

(注)1991年1月1日から電話及びファックスの番号が次のように変更になります。
TEL：03-3592-8470　FAX：03-3595-2429又は03-3592-8470

SEVENTH INTERNATIONAL

事務局からのお知らせ

本年6月にプレリミナリー・アナウンスメントにより、世界各国にご案内をしましたところ、世界各国から既に130名以上の方が論文を発表したいとの希望を寄せられています。

今大会は30周年という記念すべき大会にあたり、またアジア地区では初めての大会でもありますので、日本からも多くのすぐれた論文発表が行われ、大会を盛り上げて下さることを期待しています。

●今後のスケジュール

アブストラクトの受付開始	1990年10月
アブストラクトの受付締切	1991年2月28日
アブストラクトの審査結果通知	6月
論文原稿の提出依頼	6月
第2回ご案内の発行(参加登録等各種申込書送付)	6月
参加登録、宿泊、ツアー等の受付開始	6月
プロシーディングの予約受付開始	6月
最終ご案内の発行	12月
論文原稿の受付締切	12月10日
参加登録料(割引)受付締切	1992年1月31日

財団だより

1．第32回海水技術研修会（平成３年２月14、15日（木、金）予定）

標記研修会が日本海水学会の主催、日本塩工業会、造水センター及びソルト・サイエンス研究財団の主催により、箱根町「箱根観光会館」で開催される予定です。

2．第６回研究運営審議会（平成３年２月22日㈮予定）

平成３年度の研究助成の選考が行われる予定です。

3．第６回理事会（平成３年３月８日㈮予定）

平成３年度の事業計画及び収支予算が審議される予定です。

4．第６回評議員会（平成３年３月８日㈮予定）

平成３年度の事業計画及び収支予算が審議される予定です。

編集後記

平成２年を振り返ってみると国の内外でいくつかの大きなニュースが明暗折り混ぜてありました。

最もショッキングだったのは、イラクのクウェート侵攻にともない、わが国ほか欧米各国の多くの人が人質にされたことです。この卑劣な行為には激しい憤りを感じました。幸い全員が解放されて、ひとまずホッとしました。しかし、湾岸危機は依然として解消されていません。

そのほか、統一ドイツのスタート、11年半にわたりイギリスの政権を握っていたサッチャー首相の辞任などその国における一つの節目が見られました。

一方、国内では、天皇陛下の「即位の礼」、東京放送の秋山特派員がソ連のソユーズTM11宇宙船による日本人初の宇宙飛行と無事地球に帰還など明るい話題がありました。

まさしく激動の１年であった感じがいたします。

本誌も発行を重ねるごとに各地の方々から様々な内容のご寄稿をいただきました。ひとえに皆様の暖かいご支援のたまものと感謝しています。これからもお気軽にご投稿くださるようお待ちしております。

|そるえんす|
(SAL' ENCE)
第　7　号

発行日　平成２年12月31日
発　行
財団法人ソルト・サイエンス研究財団
(The Salt Science
Research Foundation)

〒106　東京都港区六本木７-15-14
塩業ビル

電　話　03-497-5711
ＦＡＸ　03-497-5712